

## ボンベイ附近における鳥類について (I)

宮本忠之

私は日本における鳥類研究のかたわら、それらと関連性のある東南アジアの鳥類に関心を持ち、1961年にはインドネシアのジャワ島に、1967年には中華民国の台湾島にそれぞれ採集旅行を行なった。今回また機会を得、インドに鳥類採集旅行を行なったのでその報告をしたい。

本旅行にあたってはプリンス・オブ・ウェールズ博物館に全面的に世話になったが、特に本旅行を推進して下さったアリ博士、また同博物館に接触を始めたのは1967年の7月からであるが、翌年出発の3月まで、毎月2回ほどの往復文書の世話、インド国内における各官庁との事務折衝、とくに銃器持込み、銃器使用、採集許可、採集物の国外持出しなど各種ライセンスの取付けなどを、すべて熱心に処理された事務長のダニエル氏、また滞在中ずっと私と同行され、身のまわりの世話や、トラブルの処理など手際よくやられた博物館鳥類研究員のアンベッカー氏、ピメント氏等に対し、あつくお礼を申し上げる次第である。

また、日本においては準備から博物館との連絡、採集標本の同定など細やかな指導を得た小林桂助氏、かつてはインドに滞在し蝶類の採集をやられ、現地の状況については精通している私の従兄の吉田真日出氏からのエスコートなしには本旅行はなし得なかったであろう。合わせて謝意を表する次第である。

旅行日程については下記の通りである。

1968年	3月25日	9時30分スイス航空で東京出発。
	3月25日	21時にボイベイに到着する。
	3月26日	博物館との連絡、日程、プログラム決定、各種ライセンス受領。
	3月27日	ボンベイ発7時5分のデカン急行でプーナに行き、そこでマハラシュトラ州森林局の鳥類採集許可を受ける。プーナ15時30分発、カンダラ16時44分着、カンダラホテルに入る。
	3月27日	採集。
	4月1日	
	4月1日	カンダラ発16時27分の急行でボンベイに帰る。ボイベイ着20時35分。
	4月2日	ボンベイ発6時30分の特急でイゲットブリーリーに向かう、10時25分着。夕方まで採集、17時30分のバスでス

リアマルに向かう、スリアマル着21時30分。ジャングル生活が始まる。

4月3日	採集。
4月4日	6時のバスでイゲットブリーリーに帰り、其処で採集。イゲットブリーリー発18時14分、ボンベイ着21時50分の予定が交通事故のため、2時間ほど延着し、ボンベイに着いたのは0時頃になる。
4月5日	午前中博物館で事務連絡をする。午後ボイベイ港外のエレファンタ島で鳥類観察を行なう。
4月6日	5時10分、トランス・ワールド航空で香港に向かう。
4月7日	14時40分、日本航空で伊丹に向かう、伊丹着19時。

以上のように採集の主な場所は、カンダラ、イゲットブリーリー、スリアマルの3か所であった。ボイベイから東南に走り、デカンに入る汽車路線と、東北に走り、デカンに入る汽車路線があるが、カンダラはその始めの方、イゲットブリーリーはその後の方の路線中にある場所、おのおのボンベイから100マイルほど離れた西ガーツ山脈中にある高原の村である。カンダラはボンベイの別荘地ともいうべき場所で、ホテルも2、3あり、そこに泊っている人達の中にも英国式愛鳥家も多く、私が鳥類の採集をしにきたことを聞いて、かんかんになって怒って来られたが、事情をよく説明して納得してもらった。山の平和を愛し、鳥の声を楽しむために長逗留をしている人達に、朝から晩まで猟銃の音を聞かせたことは本当に申し訳のないことであつたと思つている。ここは山々に囲まれた盆地のような所である。インドの山は大体不毛で岩場が多く、西部劇に出てくるような形のものであるが、カンダラは森に囲まれた人の住むのにもよいが、鳥類の生棲・繁殖にも絶好の場所、ここで生棲している鳥類の種類は350種以上とのことであつた。日本全土を通じて迷鳥も入れて430種くらいにすぎないことを考えると、環境的に如何によい場所であるかがわかる。また鳥の数も非常に多く、生棲密度も日本と比べものにならないほど高い。ホテルのすぐそばでも、コウラウが群をなして樹木の間を飛び回っており、オウチュ



ウが長い尾をひらり、ひらりとさせながら飛び回っているのしばしば見られた。またムネアカヒメゴシキドリのコ、コ、コという鳴き声は朝早くから日暮れまで、日中も休みなくやかましいくらいに聞かれた。しかし、この鳥は体色のせいか鳴き声の割には観察し難い鳥である。また、日本では迷鳥でほとんど見ることの出来ないコウライウグイスやアカマシコも群をなして飛び回っており、タイヨウチョウも樹の上で細い声でさえずっていた。

イゲットブーリーも西ガーツ山脈中の小さな村であるが、ここはカンダラほど樹が多くなく、また、標高もカンダラよりかなり低い場所である。日ざしは極めて強く、日中はいたいような暑さであるが、夜はすこし肌寒いくらいである。ここの住民は数少ない大きな井戸の回りに集まり、洗濯をしたり、おしゃべりをしたり、また、家で飲料に使う水を真ちゅうの容器に入れ、頭にのせて運んでいる女の姿もよく見られた。ここは樹が多くないせいか、山地性の鳥より平原の鳥が多く見られた。また、樹上で生活する鳥も数少ない樹々の間を往き来しているのも目標をつけ易く、採集をするのにはかえって好都合であった。

スリアマルはイゲットブーリーから約4時間バスに乗り、その終点である。途中でダム建設の爆破作業で30分ほど待たされたり、途中の部落でまた30分ほど待たされたりしながら、やっと到着する。バスの出口には部落の人が集まり、うさんくさそうな目付きで注目しているのには、異国での不安というものを初めて感じた。宿に入ると早速警官がやって来て、いろいろな質問を始めた。「ここへ日本人が来たのは初めてであるし、それが銃を持って入って来たのを見て村の人が非常に警戒しているので危険である」と言うのである。「したがって、今晩は宿の窓の下でわれわれが寝てやろう。明日はジャングルに入るな、責任は持てない」ということである。宿といってもベッドもなく、石の上にじかに寝るのであるし、警官にはおどかさされるし、また、ここはマラリアの発生地であるということで、薄暗いカンテラの火を見ながらなかなか寝つけなかった。しかし、翌日目がさめてみると、前日の不安はふき飛んでしまうくらいの美しい景色に、何となくすがすがしい気持ちになってきた。村の人は宿の囲りに集まって来たが、彼等も、昨夜見た私の感じとは違うものを感じたらしく、話をしているうちに、だんだんうちとけてきて、警戒心もうすらぎ、採集の手伝いをしてやろうという人も出てくる状態で、やっと警官からもジャングルに入る許可も出、村の人の案内でジャングルに入った。しかし、ここのジャングルは、鳥の種類もカンダラあたりとかなり違っており、非常に面白いのであるが、樹が皆大き過ぎて射程距離に入

り難く、採集の能率はあまりあがらなかった。それに山歩きで水筒の水も午前中になくなってしまい、午後は水なしの行軍で採集どころではなくなってしまった。村の近くに帰って来て、牛の飲料の水場のある所まで来ると、同行のビメント氏がこの水を飲めというのである。どんより濁った水で、10人ちかくの子供がその中で足や体をざぶざぶ洗っているし、どうなることかと不安であったが、やはり郷に入っては郷に従わざるを得ないと思ひ、かびくさい水を一口飲むと、もうどうでもなれと1ℓちかくもがぶがぶ飲んでしまった。採集をする時も子供がぞろぞろついて来るし、標本を作っている時も囲りをぐるりととりまいて見ているし、能率の面ではかえってマイナスであったが、部落の人達と仲良しになったことは事実である。ただ、私を通して日本人というものに対する理解をしているのだという意識がちょっと気がかりであった。また、食料は全部ボンベイで缶詰などを買ひこんで出かけたわけであるが、かびのはえてしまったパンをけずりながら質の悪い生水を飲まねばならない生活は非常に不安であったが、よい経験になったと思っている。ただ、空缶などを喜んでもらっていく住民を見ると、もうすこし余分に食料をもって行き、食料不足に悩む彼等にすこしでも分けてあげられたらとも思った。

いろいろな意味において博物館が作ってくれたプログラムは、私にとって有益であった。これは博物館の採集旅行者に対するあつかいが非常によく馴れているためであろう。第二次世界大戦後もアメリカ、イギリス、西ドイツ、ソ連からも鳥類採集家がどんどん来ているようである。日本の鳥類研究者も日本国内だけにとどまらず、やはり外国に目をむけることの必要性を痛感した次第である。以下、採集・観察鳥類目録、その形態・生態などについて説明したい。

- 参考文献 ① Fauna of British India. Birds, 8 vols, by E. C. Stuart Baker  
② A synopsis of the Birds of India and Pakistan, by Ripley (D.)  
③ The book of Indian Birds, by Ali (S.)  
④ Birds of Borneo, by Smythies (B.E.)  
⑤ the Birds of Burma, by Smythies (B. E.)  
⑥ Birds of the island of Java, 2 vols, by Kuroda  
⑦ Birds of Malaysia, by Delacour (J.)  
⑧ 原色日本鳥類図鑑：小林桂助  
⑨ 原色現代科学大事典：5. 動Ⅱ. 学研  
⑩ 銅鳥集成：鷹司信輔  
⑪ 「ジャワ島の鳥類について」宮本忠之 兵庫生物 (第4巻, 第3~4号)  
⑫ 「台湾島の鳥類について」宮本忠之 兵庫生物 (第5巻, 第5号)